再度山

甲山 羊二

突然、生暖かい感触が首筋を取り巻いた。同時に後部から妙な気配が伝わった。僕は素早く車を路肩に寄せ、サイドブレーキを引いた。そして恐る恐る後ろを振り返った。

一瞬、僕はハッとした。

後部座席には若く美しい女がひとり座っていた。白のブラウス。黄色のロングスカート。

僕はその様態を探るように眺めた。不思議と恐怖はなかった。心地良い香りがした。

エアコンのよく効いた車内で、僕と女は黙ったまま、お互いを見つめ合った。

「本当にすみません」

女はそう言いながら深々と頭を下げた。長い黒髪がその表情を覆った。

「本当にごめんなさい」

「いや、それは・・・」

女は髪を掬いながら、ゆっくりと顔を上げた。

「やっぱりきちんと手を挙げればよかった」

女はそう言って軽く下唇をかんだ。

「とっても誠実そうな方だと思ったんです」

女の澄んだ瞳が、妙にこちらをほっとさせた。

「また、一体どうして」

「実はお願いというか」

女は両手で丁寧に前髪を整えた。細く白い二の腕が無駄なく動いた。

「やっぱり私降ります」

そう言って女はうつむいた。艶のある黒髪が、その物憂げな表情を再び覆った。

僕は女を見つめた。あり得なかった。けれども、女は存在している。僕は改めてそう思った、

「どうして僕の車なんかに」

女はうつむいたままじっとしていた。

「ご迷惑なら、私諦めます」

「いや、そうじゃないんだ」

僕はすかさず言葉を続けた。

「君の願いが知りたい」

女は再び顔を上げ、ぽつりと小声でこうつぶやいた。

「再度山の山頂へ行きたいんです」

「再度山」
「はい。是非お願いしたいんです」
再度山はデートスポットとしてよく知られた場所だった。
「無理ならいいんです」
日が落ちるまでには、まだ十分余裕があった。
「構わない。行きましょう」
「本当にいいんでしょうか」
女はほっとした様子で、軽く頭を下げた。
「再度山に特別な思いでも」
女は軽くうなずいた。
香りはまだ続いていた。
僕はゆっくりとアクセルを踏み、再度山へ向けて車を走らせた。
間もなく、車は山麓へと入っていった。緩やかなカーブを幾つか経ながら、標高差のそれ程ない山頂へと向かっていった。

◇

山頂に人影はなかった。
僕と女は展望台まで並んで歩いた。
蝉の声が山全体に響いていた。
「やっと来れました」
「初めて」
「いいえ。今までも」
展望台にも人の姿はなかった。
「実は私、もうすぐ結婚するんです」
僕は思わず女に目をやった。
「やっぱりどう考えても変ですよね。だって死んでしまった人間が結婚するなんて。でもその相手の人、本当にすごく良い人なんです」
女はそう言って、ベンチに腰を下ろした。
「やっぱり変ですよね」
穏やかで伸びやかな喧騒が、どこからともなく届いた。
「話、聞いてもらってもいいですか」
「もちろん。この僕でよろしければ」
さらりとした風が頬をかすめた。それに乗って、船の汽笛が繰り返し耳元に伝わった。
「私、すごく悩みました。とことん悩んで、悩めるだけ悩んで、そして決めました。もう一度、きちん

と生きてみようと思ったんです」
柔らかな西日が、女の横顔を穏やかに包んだ。
「私、とても好きな人がいたんです」
女は僕を見てそう言った。
「この場所で結婚の約束まで交わした人でした。でもいろんな事情が重なって・・・。お互い大好きなのに、結局は別れることになったんです。最後にその人と会ったのも、やっぱりこの場所でした。それから私はたったひとりでこの山を下りたんです。何もかもが嫌になった。それから家に戻ってから、やっちゃったんです、私」
「やっちゃった」
「そう、すーっと」
「すーっと、か」
「私、馬鹿でした。結果、周りの人を悲しませることになった。両親も、兄弟も、友人も。それに大好きだったあの人までも。自分のことだけ見てたんです。自分のことだけ考えてた。自分だけが辛い、自分だけが悲しい、自分だけが苦しんでる。どうして自分だけがこんなに惨めでいるんだろうって。何もかも自分が中心だったんです」
女は言葉を続けた。
「あの世にはいろんな人がいます。生きたくても生きることができなかった人。私のように生きるのを止めてしまった人。後悔なく生き切った人はほとんどいません。だからこそ、あの世でもう一度人生をやり直そうって。もう一度頑張ってみよう、そう思ったんです」
「あの世か」
「そんな時、私はある人と出会いました。話を聞いたり、聞いてもらったり。そうやって少しずつふたりで過ごす時間が多くなっていったんです。それからしばらくして、私は自分の気持ちの変化に気付きました。恋だけは二度としないって、そう自分で決めていたのに」
女の頬がほんの少し赤く染まった。
「でも好きになった」
「はい」
「本気で惚れたんだ」
女は軽くうなずいた。
「私にとってこの場所は原点なんです。私は一度ここで終りました。そしてもう一度ここから始まるん

です。でもなぜかひとりで来るのは怖かった。どうしてもひとりでこの場所に来ることができなかった。だから今日はこうやって無理を承知でお願いすることにしたんです」
　さっきまでの西日は徐々に弱まっていた。そしてそれは仄かな橙色に変わろうとしていた。
「ありがとうございました」
「君を乗せたあの場所まで送ろう」
「いいえ、私は大丈夫です」
　女は笑顔でそう言った。
「もう少し私ここにいます」
「君、まさかここから歩いて」
「ここは私の原点ですから」
　女は駐車場まで僕を見送った。
「さようなら」
「お幸せに」
「さようなら」
　僕は女に手を振った。
　女は軽く会釈をし、それから笑顔で僕を見送った。
　香りはそこで消えた。

◇

　翌日、僕は花を買った。そして、そのまま再度山へと車を走らせた。
　頂上には人影はなかった。僕は展望台へと向かい、持って来た花をそっと手向けた。
　夕暮れが迫っていた。僕は車に乗り込んだ。
　ほんの一瞬、例の香りがした。そしてそれはすぐに消えた。